



神奈川・レスキューサポート・バイクネットワーク 会報第20号

KANAGAWA Rescue Support Bike Network News

2004年4月1日号, No.20

第20号目次

- 1、2004年代表として (2004.4.1)
...2004年度代表 坂本篤哉
- 2、2003年度総会報告(2004.2.1) ...神林邦彦
- 3、ライダーの為の救急救命講習会参加(2004.2.8)
...河内善徳
- 4、宮城地震レポート(2003.8.19)
...埼玉RB副代表 谷内太一
- 5、防災ギャザリング報告(2004.1.10 - 12)
...山田泰
編集後記

2004年度代表挨拶

2004.4.1

2004年度代表 坂本篤哉



2004年度の神奈川RB代表を務めさせていただきます、坂本です。神奈川RBが発足してから、早くも7年が経ちました。神奈川RBが昔から変わっていない事、それは、色々な考えを持ち寄って、一緒にあれこれ悩んで決めるという事。私が神奈川RBのメンバーで

いられる最大の理由は、この事が大きいです。何故ならば、私自身が我が強く、他の人と違った考えを持つ事が多い為です。でも、神奈川RBでは、例えそんな人の意見であっても、聞いた人それぞれが自身の中で考え、判断し、そして自身の意見を発言してくれる。それは、私にとってとても嬉しいことです。決して周りの意見に捉われずに自身の考えを持っている、そんな同等の仲間であられる。だからこそ、私も自身の考えをトコトン発言する事ができる。そして、私が間違った発言をしても、みんなが「それは違うんじゃない?」と、私が自身で考えて判断するような問いかけをしてくれる。決して頭ごなしではなく、あくまでも自身の判断に全てを委ねてくれる。確かに、これは考えようによっては、とても厳しい事でしょう。でも、それは、誰かが教える立場であるとか、誰かが導く立場であるとか、そういった関係ではない、あくまでも全てのメンバーが同等の立場であり、お互いがお互いを磨き合う立場だからこそその厳しさです。

私は、現在の神奈川RBの在り方をとても嬉しく思います。例え時々しか参加することができなくても、一つの目的の為に集まった皆さんは、全てが同等の立場です。時には厳しい言葉をぶつけられる事もあるでしょう。でも、それら全ては、お互いがお互いを磨き合う為のものと私は考えます。例え衝突したとしても、それは一つの目的に進む為で

す。これからも、一緒に何かを考え、そして形にしていきたいと思います。

2003年度総会報告

2004.2.1

神林邦彦



去る2月1日神奈川RBの2003年度総会が行われた。以下はその報告です。

日時: 平成16年2月1日(日)、14:00~

場所: かながわ県民センター303会議室

当日は来賓:3名(千葉RB 丸山氏・埼玉RB 谷内氏・東京RB 中村氏)を迎え会員24名委任状12名新入予定会員2名出席を得て池田喜由の進行により行われました。

定刻の午後2時、司会(池田)より開会宣言された総会はまず、来賓が紹介され、来賓代表として谷内氏(埼玉RB)が挨拶。続いて2003年度代表井上の挨拶の後、井上、手塚、太田3名により議事について説明がありました。

議事は以下の通りです。



1号議案:2003年度神奈川RB活動報告に関する件、2号議案:2003年度神奈川RB決算に関する件、3号議案:2004年度神奈川RB役員選出に関する件、4号議案:2004年度神奈川RB活動計画に関する

件、5号議案:2004年度神奈川RB予算案に関する件等につき事務局局長手塚、会計太田らにより詳細な報告があり、満場一致により承認された。

以下新年度役員、リーダーを紹介する。

(代表)坂本篤哉 (副代表)池田喜由・太田隆行・矢代幸雄・神林邦彦 (事務局長)手塚則生 (会計監査)梶エミ子・山田泰

各地区リーダー、(北部)渡辺和也 (東部)村井浩久(欠席) (西部)永山充 (南部)辻谷圭



各分科会リーダー (バイク分科会)渡辺和也 (情報通信分科会)坂本篤哉 (救急救命分科会)河内善徳 (震災時活動研究分科会)山田泰



最後に新年代表坂本篤哉が挨拶し午後14時40分、司会(池田)により閉会宣言され終了した。

第2部として、午後2時50分から来賓の谷内氏(埼玉RB)による講演があった。内容は、昨年7月26日から始まった宮城県北部連続地震後に逸早く被災地に赴き支援活動をした事と、それに伴う諸問題点等、実際に現場を目の当たりにした立場から貴重な経験談を話された。本件は別題で今号に特別寄稿して頂いているので参照されたい。



引き続き第3部として、焼き鳥「ゆう」にて新年会(懇親会)が開かれ、大いに盛り上がった。

ライダーの為の普通救命講習会報告

2004.2.8

河内善徳



2/8(日)、辻谷さんよりお知らせのありました「ライダーの為の普通救命講習会」に参加してきました。場所は府中消防署3階会議室で、krbからは私と後藤さんの2名が参加しました。朝、7時過ぎに家を出発し途中多少迷いましたが、8時40分頃には駐車場に指定されていたルミエール府中の駐輪場に到着しました。参加人数は17

名で、途中、出場などで抜けた方もいらっしゃいましたが4名の救急隊員の方々に指導を受けました。最初、消防に関する説明があり、前日の2/7(土)の出場は33件で多いときには40件以上の救急隊の出場があるそうです。府中消防署でフォローしきれなければ、近隣の府中などから応援を受けるそうです。また最近では東京都ではPA連携と言って、ポンプ車(Pumper)と救急車(Ambulance)が同時に出場することが多いそうです。(昨日の「ボランティアの為の救護法研修会」でもその話が出ました)

救急車よりも消防車の方が皆さん、道を開けてくださるそうで、消防車の方が早く到着するそうです。皆さんも救急車を呼んだはずなのにポンプ車が着たからといってあせらないでください。少し待たば救急車も着ますから。講習ではまずは心肺蘇生法を行いました。以前、習ったときは「脈の確認」でしたが今は「循環のサインの確認」に変わっており戸惑ってしまいました。心肺蘇生法の流れは以下の通りになります。

- 1.周囲の状況確認(交通量が多いところでは車を止める)
- 2.大出血の有無の確認(出血が多い場合は止血を優先)
- 3.意識の確認(3回、だんだん大きな声をかける)
- 4.助けを求める(救急車を呼んでもらう人は指差してお願いします)
- 5.呼吸の確認(出来るだけ傷病者の口や鼻に耳を付けるぐらい近くで)
- 6.人工呼吸2回(580~800ml位、胸が膨らむ程度)
- 7.循環のサインの確認(呼吸、咳、動きの確認)

- 8.心臓マッサージ(15回)と人工呼吸(2回)を4サイクル1分間
- 9.循環のサインを確認し無ければ「8.」へ戻る

注意点としては以下のことを挙げられていました。

- 1.大出血は65kgの体重で500ml(ペットボトル1本分)ぐらいなら許容範囲だが出血が続いているようならまず止血
- 2.呼吸の吹き込みは580~800ml程度で胸が膨らむのを確認
- 3.心臓マッサージは80~100回/分のペースで
- 4.脳に血液(酸素)を送ることが重要で完全な心肺蘇生法を思い出せなくても救命の為には行ってほしい
- 5.溺れた人に人孔呼吸を行う場合、他より救命率が高いのであきらめずにやってほしい
- 6.交通量の多い所での傷病者の移動は、車を止め、頸椎損傷に気をつけて運ぶ(首を固定する)



今回は配布されたレサコを使って人工呼吸を行いました。私は初めてこれを使った為ちょっと失敗してしまいました。レサコはご存知の通り、傷病者の唾液などが付かないようなビニールと、息を吹き込むときに逆流

しないようなパイプが付いており、傷病者の吐いた息はパイプと唇の隙間から出ます。ちょっと考えれば当たり前のことで恥ずかしいことなのですが、私は息を吹き込むときに管だけをくわえて行った為に、傷病者の肺に空気が送られず、唇の隙間から抜けてしまいました。最初の二回の人工呼吸の時、それに気づかずあせってしまいました。それに気づいて今度はいつものように口を覆う形で息を吹き込んだのですが、ビニールがある分、隙間が開きやすくそこから空気が抜けてしまいました。今までレサコがあれば感染症を気にせず人工呼吸が出来るとしか考えていませんでしたので、その用法にこんな落とし穴があるとは思っていませんでした。やはり訓練とはいえ、経験は大切ですね。次にヘルメットの脱がせ方を行いました。これは以前、中島さんがコーディネートしてくださいました。八ヶ岳での救急法の講習会で経験された方も多いと思います。その時とは多少異なると思いますが以下に今回習いました注意点を示します。



- 1.ヘルメットを脱がすときは必ず二人以上で行う。2.一人は首を固定し頸椎の損傷を防ぎ、もう一人がヘルメットを外す。3.意識の確認を行い、意識があるのならば服を楽にする。4.軽く患部をさわって、その反応を見て状況を確認する(骨折、打撲など)

5.意識がない場合一人は首を動かさないように両手でしっかり固定し頸椎の損傷を防ぎ、もう一人がヘルメットを外す。6.ヘルメットのアゴ紐は外すとき首に負担がかかるようなら切断する。7.ヘルメットはアゴ下部分のふちに指をかけ左右に広げる(力いっぱい)。8.時間はかかってもいいので頸椎に負担がかからないようにそのまっゆっくり脱がす。9.ヘルメットが脱げる瞬間(抜ける時)、反動が大きいので注意する。

また傷病者に近づくと、傷病者の視界に入らないように気をつけた方がいいそうです。というのは傷病者は不安な為、人が近づくとそち

らの方に頭を向けてしまうようで、そのときに頸椎損傷を悪化させることがあるからだそうです。次に傷病者の移動(搬送)を行いました。だいたい傷病者一人を運ぶのに四名以上の補助員が必要だそうです。



二名は傷病者の左右で胴体、一名は足、一名は頭の上(顔の上じゃないですよ)で頭と頸椎の保護をしながら持ち上げます。ただし四名とは基本的な数で、傷病者の体格によってその数は上下します。たとえば体重100kgの傷病者を小柄な女性4人で持ち上げるなんて無理ですもんね。ただし、人数が多ければ良いわけで無く、補助員が多すぎると連携が取れなかったり、体がぶつかってしまい移動に困難が生じたりします。次に、首を損傷している可能性がある場合の人工呼吸法を行いました。1.救助者は傷病者の頭頂側に位置する。2.ひじを立て、両手小指を傷病者のエラに引っ掛ける。3.中三本の指をアゴの下にかける(軽く支えるだけで良い)。4.小指と中三本の指でアゴを顔の前面方向に引く。5.親指をアゴ(唇の両端の下)にかけ、傷病者の胸側に押す。6.開いた口に息を吹き込む。最後に三角巾による額と腕等の保護を行いました。だいたい以上が今回の「ライダーの為の普通救命講習会」のおおまかな内容です。三時間でこれだけの事を学び、かなり内容は充実していました。忘れていたり、良く分からないままにしていたことが明確になったりと今回の講習会で得たものは大きかったと思います。

最後に今回、以前横浜で取った「上級救命講習」の期限が今年の6月までと言うことに気づきました。KRBで何人が同時期に受けたように記憶しております。皆さんも今一度、終了証を確認してみてください。

最後に今回、以前横浜で取った「上級救命講習」の期限が今年の6月までと言うことに気づきました。

KRBで何人が同時期に受けたように記憶しております。皆さんも今一度、終了証を確認してみてください。

宮城地震レポート

埼玉R.B.副代表 谷内太一(神奈川R.B.名誉会員)



『宮城県北部連続地震 復興支援』

～ボランティアセンター立ち上げの手足として活動して～

R.B.に関わるようになり常に揺れを気にするようになって以来、初期微動の長さや本震の大きさと揺れ方で、

なんとなくではあるが地震の規模を想像できるようになってきた。7月26日朝、ゆっくりとした長い揺れで目を覚まし、かなり遠くの地震だな～本震がこれだけ揺れるとなると結構大きな地震だな～できれば深いところの地震で地上では被害が出ていないといいな～と思いつつ出勤の準備をしたことを記憶している。出勤してから、インターネットで大きな被害が出ている事を知り緊張した。翌日が日曜日でもあり、その日の午前中には現地に向かうことを決めた。これまで「自分の好きなバイクが、災害時に役に立つなら何かしたい!」との思いから、一人のサラリーマンとしてR.B.活動に参加して6年。「R.B.に何が出来るか!」「何をすると役に立てるのか!」を考え続けた日々だった。「人命救助」や「行政機関や他の機関との連携」「ボランティアセンターでの活動」などを本や経験者の話を聞きながら学び、日頃の訓練に取り入れながら様々な事を考えてきた。しかし、現在の自分達のR.B.

の状態を見つめたときに、今ひとつ災害時に活動するR.B.の姿が描けずにいた。背伸びをすれば幾らでも活動の範囲の広がる災害支援活動。ところが構成員の殆どが、家庭を持ち休みも取りにくい仕事を持つ者ばかり。正直言って、今後の活動の限界を感じていた。宮城県には宮城R.B.もあり、地域から地元のボランティア活動も活発であることを知っていたので、遠くのR.B.が役に立たないとも感じていたが、行ってみないと役に立つ立たないも分からないためとにかくそんな情報収集と支援活動の経験をさせてもらうためにも行ってみることにしたのだ。地震翌日の日曜日午前3時頃に、東京R.B.の山田氏と実家が震源に近い埼玉R.B.の佐藤氏と3人で車に乗り込み東北自動車道を一路現地へ。地元民の佐藤氏の裏道案内に助けられながら被害の出ている地域に順調に向かうが、やはり渋滞。一瞬「我々が現地の渋滞に手を貸してしまい迷惑とならないか」との心配が頭をよぎった。進んでみると、大きな交差点の信号機が動いていない。横に見える鹿島台役場は窓ガラスも割れさんざん有様。大きな橋も車がやっと通れる大きな段差ができ、いきなり道路の1車線以上が崩壊している箇所もあり身が引き締まる。こんな所をぼんやりとバイクで走っていたらと思うと、いろいろと考えざるを得ない。既に先に到着していた千葉R.B.のメンバーと携帯で連絡を取り、南郷町(災害救助法の適用を受けた5町の中の1町)の役場前で合流。南郷町では、昼から南郷町社会福祉協議会(南郷町社協)の方とボランティアセンター(ボラセン)についての話し合いがあることを聞き、それまでの間に徒歩で南郷町内の被害状況を確認することにした。(この話し合いは、被害状況の把握のためいち早く現地に入っていた東京災害ボランティアネットワーク(東災ボ)に協力するA-yan Tokyoの植草氏の働きかけであることを後々東京で知ることとなった)



古い建物は傾き、次の余震では崩れてしまいそうな家屋もあり、瓦は落ち、塀は崩れ、電柱は傾き、家の中はよく被災地の写真で目にする状態となっていた。昼には宮城R.B.のメンバーもバイクで駆けつけた。

南郷町社協での打ち合わせには、南郷町社協局長をはじめ、みやぎ災害救援ボランティアセンター、宮城県社協、東災ボ、R.B.が同席して情報の交換を行った。南郷町社協の方は、町内の被災状況やいかがわしい業者による住民の混乱などを考慮にいれて、ひとまず2週間の期間限定でのボラセンの開設を決意された。



この打ち合わせに同席した私は、このボラセン開設を決意されるまでの南郷町社協の方の困惑を知ることになった。それは「住民の半数近くが住宅に何らかの被害を負っており、なんとかその力になりたいがボラセン開設にあたっては割ける人材も運営のノウハウもなく、開設後もどれだけの人が押し寄せ、どれだけの費用が掛かり、最終的にどれだけの金銭的な援助が得られるのかも分からない不安を抱え、一度開設してしまえば後には引けない責任が発生する。」こんな迷いだったように見えた。そんな中で、ボラセン開設中にみやぎ災害救援ボランティアセンターから2名、東災ボ関係から

2名の運営サポート支援協力の確約があったことが開設を決意される大きな力になったようである。今回は有感地震の連続する地震で、我々が話し合いをしている間にも何度となく突き上げるような大きな余震が続き気が気でなかった。それは本当に恐ろしい揺れ方で、地震慣れた関東育ちの私も余震の度にビクビクしっぱなしで落ち着かなかった。事実、次の日の早朝4時に車の中で寝ている我々を襲った余震の怖さに、私はその次の日も建物の中で寝ることができなくなるほどであった。避難所の体育館に寝泊まりしている方々の悲痛は想像に難くない。ボラセン開設が決まってからは、私たち他県RBは南郷町社協のお手伝いに徹することにし、社協内の事務所の片づけを自主的に始め、ボラセン開設に必要なピラや書式フォーマットの作成、そして差し当たり必要となる資機材の調達等を社協の方と相談をしながら行っていくことになった。



一方、宮城RBは、我々他県RBが去った後もボラセン開設の間、ボラセン本部に人を置き続け、ボラセンの手足として活動を続けられた。ボラセンの中は、混乱・判断・行動・困惑・改善の連続で、日々変化への対応を



迫られる精神的に苦しい業務の連続である。もちろん、支援現場で活動するボランティアにも同じ事が言える。簡単にボランティアセンターの主な業務を紹介してみる。

・資材の確保 ・資金の調達(資材・専用電話・FAX・臨時携帯・ボランティア保険) ・ボランティアの問い合わせの対応 ・ニーズの受付

・作業内容の確認 ・ボランティアの振り分けと管理 ・作業現場までの輸送 ・マスコミ対応 ・ケガ対応 ・問題点の抽出,改善 ・引き継ぎ。また、ボラセンがよく県外のボランティアを断るケースがあるが、なぜか？今回は、主に次のような理由であった。

・人数制限のためにどこかに線を引きたい・問い合わせの対応の軽減・宿泊/駅からの足への対応を避けたい。

今後のRB活動について今回の活動を通して感じたことを列挙してみると以下になる。

- ・RBが何をやる団体が直感的に分かりにくい(イメージが作られていない)
- ・使命感とやる気が、二次災害の危険を考えた行動と判断を鈍らせる
- ・いざっ！というときに役に立つためには、実際の活動経験を持つことがなよりの近道
- ・RBとして活動するには、一つのRBだけでは負担が大きすぎる
- ・日頃からのRB同士の協力が、RBの活動の可能性を広げる
- ・RBの団体イメージを築くことは、結果として被災者にとって有益である
- ・活動者の志気の維持は、被災者の苦痛の軽減につながる

・混乱する被災地では、志気の低下につながる組織間の軋轢はつきもの

・被災地にいるメンバーも他のボランティアも被災者と考え、思いやりを持った行動と言動が不可欠



仕事もあるため、3日間の活動でひとまず現地を後にした。そして、次の土曜日の明け方出発で今度はバイクで山田氏と宮城に向かった。南郷町ボラセンは、地元地域の方々の協力によって運営も軌道に乗り順調に機能していた。なによりも驚いたことは、その日の活動を終えた後のスタッフ反省会であった。様々な問題点の各自から挙げられる中、普通なら険悪な雰囲気になりがちであるはずだが、いとも簡単に「問題点」を「改善点」として誰もが認識し、各役割分担ごとに改善案が考えられていく雰囲気に圧倒された。「なんて素晴らしい人達なんだ！」と感動した。他の4町のボラセンを勝手に見学させてもらった後、宮城RBの方々の横で仮眠をさせてもらい、深夜に帰路についた。



おまけの話だが、現地を去る際のインター手前で山田氏のバイクがパンク！深夜であることと、パンクのタイヤがチューブタイヤであること、修理機材を持参していることから、インター近くのガソリンスタンドの一角を借りて2人で汗だくのパンク修理となった。これから400km近い行程を前にしてのこの不幸を、二人ともニヤニヤしながら楽しんでたのがバイク乗りの性を感じたひとときであった。

私は、これからも自分達の地域のもしもの時に備え、RBが被災地の方々の苦痛の軽減のお役たてる団体になれるように活動を続けていきたいと思っている。

防災ギャザリング報告

2004.1.10 - 11

山田泰

ギャザリング「防災ボランティア見本市」について報告いたします。防災ギャザリングとは...「自分たちのまちから被災地に対して出来ること」を考えるイベントとして、阪神・淡路大震災の2年後(1997年)に第一回目を開催し、以降毎年阪神・淡路大震災の起きた1月17日前後にかながわ県民センターを主会場に開催しています。様々な視点から「防災」「まちづくり」について、この場に集う人々と考え意見を交しながら、災害時だけではなく平時からお互いの顔の見える関係をつくることを目指して行われています。

初日の来場者は関係者がほとんどでこれに取材の記者の方々、ポスター展の見学者の方々を含め約30~40名程度でした。同時開催で横浜市内小学校児童の防災ポスター展が同じホール内で実施されましたがこちらの児童父兄の方も数組で昨年比較で出足が低調でした。

全体を通じてKR Bのメンバー(展示会で言えば説明員)が多く、かつ、いろいろご意見を頂きありがとうございました。参加していただきました皆様ありがとうございました。おかげさまで無事終了できました

。2日目は「歩け歩け」協会の避難民役の皆さん約150名が来場され
展示を見て行かれました。その他訓練参加者で200名くらいの方が
来場しました。簡単ですが以上報告いたします。

[その他のイベント]

運営ミーティング 3/7、会報発送作業 3/30、春の懇親会 3/
30

ボランティアのための救護法研修会・1月、2月、3月

・・・！！お知らせ！！・・・

神奈川R B携帯電話用サイト開設中

<http://k.excite.co.jp/hp/u/krpkrb/>

(i-mode/J-sky/EZweb の各形式対応)

編集後記

やっと春が来ました。ツーリングの季節到来です。個人的には転勤で
群馬の地に参りましたがバイクの距離感から言えばすぐ近所！という
感じですよ。

夏は北海道を皮切りに、上信越へのツーリングが楽しめそうです。土
地が変われば空気が変わる。空気が変わればまた新たな楽しみが
増えます。運転技量のアップも課題です...なんていろいろと考えま
すね。

一人で走るのもいいですが仲間が居ればもっと楽しくなります。皆さ
ん一緒にツーリングに行きましょう。(お)

神奈川R B事務局

代表:井上哲也、事務局長:手塚則生

郵送先:〒221 0835 神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町2 24 2

かながわ県民活動サポートセンターレターケース No.81

Fax:045-312-1862(取次ぎ:レターケース No.81 宛て)

URL: <http://www2.airnet.ne.jp/krb/>

バイクによる災害時救済活動支援ボランティア

神奈川・レスキューサポート・バイクネットワーク会報(年4回発行)

発行者:神奈川R B会報担当 太田隆行

神奈川R B会報発行にあたりまして、お好み焼き「おにがわら」様のご
支援を頂いております。みんなで行きましょう！



関西風・広島風 お好み焼き おにがわら

店主:中島信義 山梨県北巨摩郡大泉村 Tel:0551-38-4030

JR小海線甲斐大泉駅北約1.5km・ダイヤモンド八ヶ岳ホテル前

夏季(7・8月) 11:30~14:30、17:30~20:30(火・水定休、祝日は普
業)上記以外の期間 11:30~14:30、17:00~20:00 (火・水定休)

おにがわら 冬季休業日は3月19日で終わりました。

パワーアップした中島さんの手料理を楽しみにお出かけください。